

2021/10/19-1

(うと Q 世話し 隠された目的の清算 上) アウフヘーベン書直し

25歳の時、生まれて初めて小説を書きました。

題名は「リーズナブル・アクター」

その当時、語彙がそれしかなかったのもう名付けましたが真意は

「日常生活で無邪気、自然体を装いながら、緻密に計算し尽くした芝居を演じている役者資質の卑怯者物語」と云う意味でした。

幼い頃からそんな処があった「自分の不実」を題材にした処女作でした。

突然今になって何でそんな昔の事を書くのだと思われるかもしれませんが、自分の中ではそれ以来、いや生まれてこの方、常に「自分は本心を隠していつも芝居をしているのではないか」という疑念が頭から離れないからです。

あれ以来 40 年以上が経った今も同じなのです。

そんな眼で前回の記事を見返してみると、或いはこの二年近く書いてきた「サバイバル日記」を通観してみると

「大変な目に遭っているという話こそ実は「おいしい話」として仕組んできたのがこの日記だったのではないか」という疑念が湧いて来るのです。

もしそれが真実だとするとこの「ナマステエブリバディ劇場」で舞台装置として宛がわれた従業員は大迷惑この上なしです。

是だけでは何の事か分からないと思いますので今少し順序立ててお話し申し上げます。

まずアウトラインを抱いて戴く為に非常に簡単な喩え話をしますと

「人は他人の成功話としくじり話を聞いてどちらを喜ぶか？」

「頭のいい奴と多少脳天気な奴のどちらの傍にいた方が、気が置けないか？」

と言う事です。

それを第一の価値観とし、それがもたらす「最後にピークがやってくる 9 回裏逆転満塁ホームランや轟啞になってすら第九を生み出したベートーベンのそのテーマ「苦悩を通して歓喜に至れ」の壮大なる感動絵巻の完成が「隠された真の目的」だとすればストーリー前段の「馬鹿な失敗」位おいしい話はなく、

「どん底だ、悲惨だ、いつ迄経っても芽が出ない」と言う裏で「着々と隠された目的を達成している満足感」から更に余裕が出、

その余裕が「この期に及んであの落ち着き。相当な大物かも」という副産物まで付いてくるとなると「おいそれとは成功出来なくなって」仕舞います。

それで成功直前で「敢えての失敗」を挿入して成功を先延ばしに。

すると又々「あそこ迄の不運も珍しい。だのに平然としている。益々持って大物かもしれない」と評価はうなぎ登り。

そしてそれを耳にして楽しむ生活。

しかし是は自分に取っては密かな大成功ですが成功を先延ばしにされて苦労している従業

員は堪ったものでは在りません。

ボスは苦勞しているのだと信じて疑わず身を粉にして働いてさえいる訳ですから。

是はもう完全なる裏切りです。

このボスは正真正銘「根っからのズル」です。

そうしてその不実者が自分だと気づいてしまった。

いや、薄々は気づいていたズルを目の前に突きつけられ、

最早これ以上見て見ぬ振りが出来なくなってしまったのです。

(続く)